

葛城

大和舞



小鍛治

黒頭

日本全国
能楽キャラバン!

新春特別公演

熊野

読次之伝

村雨留 墨次之伝

藤行留



日時

2023年
1月29日(日)

第一部 午前10時始

第二部 午後2時30分始

(開場は各30分前)

会場

京都観世会館

チケット

12月1日(木) 午前10時発売

S 席 (正面指定)	5,000円
A 席 (脇正面・中正面指定)	4,000円
B 席 (二階自由)	3,000円
学生席 (二階自由)	2,000円
通し券 ※一部・二部で同じ座席となります	8,000円

(S席のみ・枚数限定)

※一部二部それぞれにチケットが必要です

※通常講座受講生、放送大学、老人大学は一般料金です

ご予約
お問合せ

京都観世会館

京都市左京区岡崎円勝寺町44

TEL. 075-771-6114
(9時~17時 月曜・12/28~1/5休み)

チケット販売サイト



日本全国
能楽キャラバン！

新春特別公演

令和五年一月二十九日(日)

第一部 午前十時始

第二部 午後二時三十分始

能

椎男 河村浩太郎
天女 大江 広祐

山岸 河村 和貴

養 老
水波之伝
從者 原 陸

林 宗一郎
片山九郎右衛門
大曾和 鼓堂
久登 井上 敬介

谷 弘之助
鷺尾世志子
浦部 幸裕
左鴻 井上 敬介

橋本 忠樹
河村 晴久
田茂井廣道
河村 晴久

谷 弘之助
越賀 隆之
浦部 幸裕
泰弘 道治

橋本 忠樹
河村 晴久
分林 道治

谷 弘之助
鷺尾世志子
浦部 幸裕
左鴻 泰弘

橋本 忠樹
河村 晴久
田茂井廣道
河村 晴久

葛 城
里安 浦田 保浩
中村 宜成
石井 景之 前川 光長
山伏 福王茂十郎
山伏 嘉多 雅人
吉阪 一郎 杉 市和
間 小笠原由祠

能

葛 城
里安 浦田 保浩
中村 宜成
石井 景之 前川 光長
山伏 福王茂十郎
山伏 嘉多 雅人
吉阪 一郎 杉 市和
間 小笠原由祠

狂言語り

林 宗一郎
片山九郎右衛門
大曾和 鼓堂
久登 井上 敬介

谷 弘之助
鷺尾世志子
浦部 幸裕
左鴻 井上 敬介

橋本 忠樹
河村 晴久
田茂井廣道
河村 晴久

谷 弘之助
越賀 隆之
浦部 幸裕
泰弘 道治

橋本 忠樹
河村 晴久
分林 道治

谷 弘之助
鷺尾世志子
浦部 幸裕
左鴻 泰弘

橋本 忠樹
河村 晴久
田茂井廣道
河村 晴久

那須語

茂山忠三郎

狂言語り

休憩十五分

(十一時五十分頃)

能

熊 野

平宗盛

宝生 欣哉
村雨留 読次之伝
墨次之伝 徒者 則久 英志

松井 美樹
橋本擴三郎 地蔵

吉田 篤史 梅田 拓海
吉田 嘉宏 和晃

浦田 保美

保親

千慧

杉浦 豊彦

樹下

千慧

あらすじ

養
ようろう
老
おとこ
水波之伝
すいはーしじん

雄略天皇の頃（濃州・美濃）の本巣という所に不思議な泉が出ると聞いた天皇は、勅使を遣わして檢分を命じた。本巣に着いた勅使は、老人と若者に出会う。老人の話では、若者は自分の息子で朝夕山に入らず薪を採つて両親を養っていたが、ある時、山路に疲れてこの水を飲んだところ、さわやかになり、疲れも癒えたので汲み帰つて父母にも与えると、すうかり若返った。老を養うということから養老の滝と名がついたといふ（中入）。
そのうち天から音楽が聞こえ、花が降り、山の神が現れて御代のめでたを祝詞で雄渾な舞を舞う。世阿弥作。

「水波之伝」の小書では、間狂言を出す。滌は登場しない天女（柳翫観音）を出し、神と仏の一体化を表現し、神を波に例え天女の舞で表し、神を波に例え山神の激しさを表す。

熊
くま
野
の

讀次之伝
よみじしじん

村雨留
むらあめのり

墨次之伝
ぼくじしじん

櫻行留
さくらぎのり

春の都。平宗盛の寵姫・熊野のもとで、故郷の遠江から朝顔病が母の便りを持参する心配くなつた母の様子。姫は宗盛に手紙を差し、それを裏表して、母に会いたいと眼をうつが宗盛は許さず、非情にも、花見の供を命じ、牛車で清水寺に向かう。途中、都大路の春景色に迷ひ、熊野の心は母を気にしながら、今まで下車をすると観音寺に母の快事を祈る。宗盛の命により車輪が切り止まり、熊野は心ならず泣く。熊野は舞わねがれ、折しもにわかに村雨が降り出る。熊野は舞を中断し、「いかにせん都の春も惜しけれ」と歌を歌ふ。一方、歌を短冊にしたため宗盛に差し出すと、宗盛はさすがに喜ぶ。歌を感じて帰ることを許し、熊野は喜んでその場から遠郊へと急ぎ立てるとき、膝をついて進む。高官の前に立つときの作法である。

「読次之伝」の小書では、「ワキが読み始めた」文をシテが読み次ぐ。

「村雨留」では、舞の間に「暴雨がおどすれ」という心で、舞の途中で舞いあげる。笛の調べを変えたり、襷子の手に変化を待たせるなどして、シテの歌を短冊にして、途中で一度墨を次ぐ。「櫻行留」では「シテが短冊をワキに渡すとき、膝をついて進む。高官の前に立つときの作法である。

葛
かつら
城
じょう
大和舞
やまとまい

出羽の羽黒山から出た山伏が大和國・葛城山に入り、吹雪に遭う。すると、この里の女は山伏に声をかけ、庵に案内する。また、この葛城山の中で集め束ねた木々のことを「しのぎ」とだと教える。それを解き火に焚いてもです。やがて後夜の勤めを終えようとすると、女は加持をして自分の苦しみを助けてくれると頼む。明王の姿で身を縛められている。女は実は葛城の神であり、昔、役行者に命ぜられた岩橋を架けられなかつたことを明かして消え失せる。（中入）

その後山伏は里の者と出会い、昔、役行者が葛城の神に岩橋を架けることを命じたが、神は自分の姿を恥じ夜しか仕事をしなかたため橋が架からず、役行者の怒りを買ひ葛城で縛られたのだという話を聞く。夜、山伏が祈祷していると、その法味に引かれて葛城の神が現われる。素により縛められた身も修法により解け、「高間の裏辺にぞ」と大和舞を舞う。そしてまた「明けぬ先に」と葛城の神は夜が明けぬ先に岩戸のなかに消えゆく。

「大和舞」の小書では、常に無い雪山が出され、シテはこれに中入する。後シテは天冠に萬字を戴き鎧を脱つ舞は「仮素」となる。これが多く、初段に下居して櫛を振り分け、大和舞をまなぶ。

小鍛治
こかじ
黒頭
くろがし

（中入）

一条姫はある夜夢を夢り、剣を打てとの勘定を宗近の許へます。

宗近は、それ程の大事の剣ならば、自分に劣らぬほどの相撲がなければ成就めども許さない。が、神は敵わず手を頬みに胸頭を頬みに胸頭に參ろうとするが、その途上、身上に行き合う。不思議にも、勅の事を早くも知ついるの姫子は唐土と日本との剣の奇麗図を語り、中でも日本武尊の夷鬼を退けた草薙の剣のことを、悉く仕方話に詠つてみせる。宗近が不思議に思つて名を尋ねると、剣を打つ事を飾り整えて待てと言ひ、力を貸すこと約束して櫛荷の方へ消えてゆく。（中入）

宗近に仕える者が、宗近の不思議な体験を再度語り、壇の用意を立てて宗近の仕事に従事して待つ。すると櫛荷の明神の使い、黒頭が現れる。宗近は身支度をして待つ。すると櫛荷の明神の使い、黒頭が現れて宗近の仕事に従事する。表に「小鍛治」を示す。

近「裏に『小鍛』と打たれた二つ銘の名劍は勅使に渡され、櫛荷は嘗に乗つて櫛荷の峯に去つて行った。

「黒頭」の小書では、前シテが櫛食の面をかけ、袋着崩し、水衣を羽織らなければならぬこともあり、手には櫛荷を持ち、櫛荷の神性を暗示する。後シテは黒頭に小飛出、オ飛出、狹蛇などの面をかけ、袋着崩で現れ、雪狐の不可思議な力を強調する。



◆新型コロナウイルス感染予防策として、当館ではアルコール消毒液の設置や、多くのお客様が触れる箇所は定期的に消毒・清掃を行っております。(検温)・手指消毒・マスク着用」「芳香素記入」のご協力をお願い申し上げます。体調が優れない場合は、ご来館前にご療養施設にご相談願います。◆許可なし写真撮影・録音・録画はお断りいたします。◆上演中は、沸沸喧嘩など音や光を発する機器の電源はお控りください。◆今後の状況により、出演者の台が変更になる場合がございますので、予めご了承ください。

交通アクセス

JR京都駅から

- 地下鉄丸太町線「丸太町駅」にて地下鉄東西線に乗り換え、「東山駅」下車、①番出口より徒歩5分
- 京都駅バスゆめA1より市バスゆめ系統「岡崎公園・美術館・平安神宮前」下車、D2より86-206系統「東山・王前」下車(乗車賃料約30分)

四条河原町から

- バスのりばEより市バス31-46-201-203系統「東山・王門」下車(乗車時間約15分)

京阪三条駅から

- 市バスゆめA1より市バスゆめ系統「岡崎公園・美術館・平安神宮前」下車
- 地下鉄東西線に乗り換え、「東山駅」下車